『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』
第３巻第２号　2020（pp.315 - 334）

【原著論文】

保育所・幼稚園における活動分析
――活動の構成と構造――

池野範男*[1]・笠井利恵*[2]・山根悠平*[2]
*[1]日本体育大学
*[2]日本体育大学大学院教育学研究科博士後期課程

本研究の目的は，問いの提出による子どもの思考の深化によって，保育における子どもの発達と学びの豊かさを新たに見つけ出すことである。そのために本稿では，問題の所在として，保育の活動分析に関する先行研究を再調査し，研究方法における課題として，これまでの保育の活動分析は子どもの理解が中心であり，保育者と子どもの関係による相互活動を取り上げる必要を指摘している。また，保育と学校教育との間での研究交流が活発に行われていない現状を指摘し，学校教育でよく使われる授業研究とその研究方法を保育の活動分析に適用することで研究交流を図るという研究の意図を説明している。

その意図から，研究方法として，この授業研究の方法を用い，保育の一場面，活動を取り上げ，分析した。その結果，次の 5 点を明らかにした。

1. 場面は，問いと答えの問題解決的活動で構成されている。
2. 当事者間には学びは成立しているが，クラス全体の学びは確認できない。
3. DVD における保育の領域「人間関係」（社会性）で取り上げた場面では，学びの中心は問いであるが，その問いは偶発的なトラブルにもとづき，保育者が子どもたちに考えるよう示したものである。
4. 取り上げた場面のように，保育のより深い学びは，偶発的な機会での学びであり，計画的ではないことが多く，的確な学び場面の把握と指導が必要である。
5. 保育では，保育者の適切な指導により，子どもたちに，その行動への判断と理由付けをさせ，より深い学びを作り出すことができる。

これらの点から，保育の教育領域でも，問いと答えの間を教育する問題解決的活動が行われ，保育における深い学びが成立している。しかし，その活動は，計画的というよりは，保育者の偶発的な機会の把握によるものであり，学びの指導という点では限られた効果であるといえるだろう。そして，保育の実際場面の活動を授業研究・分析の方法に基づき分析すると，子どもたちの発言や行動の深い学びを見つけることができることを示している。

キーワード：保育，学校教育，授業研究・授業分析，人間関係，深い学び

Activity Analysis in Preschools and Kindergartens
―Background, Aims and Methods of This Study―

Norio IKENO*[1], Rie KASAI*[2], Yuhei YAMANE*[2]
*[1] Nippon Sport Science University
*[2] Graduate Student of Doctor Course, Graduate School of Education,
Nippon Sport Science University

The aim of this study is to newly discover growth and richness of learning among children in day-care. For that aim, this study mainly addresses the whereabouts of background and methods of this study, points out the current situation where research exchanges between day-care and school education are not actively carried out, and explains the intent of the research, i.e. promoting research exchange by applying methods of research on school education to day-care.

According to the aims, by means of the approach of lesson study that is widely used in school education as the research method, we picked out and analyzed a day-care setting. Results of this study found out the following four points:

1. The setting consists of problem-solving activities forming questions-and-answers.
2. Learning is made up between the concerned children, however, learning in the class cannot be confirmed.
3. The learning stems from questioning, which was conducted by the teacher following the accidental occurrence of trouble.
4. The setting brought up in the field “sociability” of the DVD is accidental and not planned. However, proper guidance from teacher allows children to make judgments and justifications for their behaviors, thereby creating deeper learning.

Based on these points, problem-solving activities that educate through questions and answers are conducted in the day-care education field, and establish deep learning in day-care. Considering that the activity is unplanned and accidental, the effect may be limited in terms of taking on learning of children. Furthermore, analyses on activities in actual situations of day-care using methods of lesson study and analysis indicated that these activities would bring deep learning in the verbal expressions and behaviors of children.

Keywords: day-care, school education, lesson study / class analysis, the field “sociability”, deep learning

1. 本研究の目的と構成

本研究の目的は，保育において，保育者が問いを提出することによる子どもの思考の深化を図っている活動を分析することによって，保育における子どもの発達と学びの豊かさを新たに見つけ出すことである。そのために本稿では，研究の意図とその方法を述べ，問題の所在と研究方法を中心にまず説明し，保育と学校教育との間での研究交流が活発に行われていない現状を指摘し，学校教育でよく使われる授業研究とその研究方法の授業分析を保育活動分析に適用するという研究の意図を説明する。

本研究は，保育所，幼稚園の教育（以下，本稿では，保育と略す）における子どもの発達と学びの豊かさを新たに見つけ出すことを目指している。

教育は，意図的な指導により，学習者の発達を促進する。一人ひとりの学びをより豊かにし，より深くすることに基づき，教育の効果である学びの豊かさ，深さを作り出すのである。

保育でも，教育の指導によって，子どもたち一人ひとりの学びを豊富にすることで，子どもたちの発達を促進する。

教育に必要なことは，第一に，意図的な指導，第二に，学びを深める工夫，第三に，計画的方策的に進めることである。

これらを満たす指導の工夫の一つが，授業研究，授業分析である。小学校・中学校などの学校教育における教科教育研究でよく使われる授業研究を，本研究で対象とする保育の研究に適用する。その目的は，授業研究，あるいは，授業分析という教科教育研究で多用される研究方法とそれが持っている研究の視点を持ち込むことによって，保育における活動とその教育的意義を新たに示すことにある。つまり，これまで研究交流の少なかった保育と学校教育（小川ほか 1978，森上 1997，西岡 2014，中坪ほか 2017）の 2 つの教育領域を研究方法によって結び付け，保育において従来とは異なった方法や視点で教育の意義を新たに発見し解き明かすことである。

本稿はそのために，本研究がもっている研究上の問題とそれを解決する方法を示し，保育の一領域「人間関係」（社会性）を事例にしてその一端を提示する。そのことによって，保育の一領域において，子どものその年齢の発達と，それに応じた保育者の活動により子どもの学びの豊かさがどのように作り出されているのかを見つけ出すことを目指す。

本稿は，次のように構成される。

１．本研究の目的と構成
２．保育の活動分析の先行研究
３．本研究の研究方法
４．授業分析による保育活動分析事例
５．本稿の総括

1.では，これまで述べてきたように，本研究の目的と構成を説明する。2.では，保育研究のこれまでの基本研究動向を見渡し，研究課題を明確にする。3.では，この研究課題を解決するための方法を提示し，その理由を述べる。4.では，アローウィン社保育シリーズ（DVD）の一つから活動事例を取り上げ，授業研究の授業分析を研究方法に用い，分析する。5.では，これまでの研究の結果をまとめ，その意義を説明する。

2. 保育の活動分析の先行研究

いずれの研究も進めるためにまず必要なことは，個々の研究者，または，研究チームが持っている問題関心，問題を説明し，その課題を特定し，説明することである。なぜならば，新しい問題，問題関心は，多くの研究者，教育関係者には目新しく，新奇なものであるため，多くの人に十分に認識されておらず，説明することが必要とされているからである。そのためには，研究者，研究チームにおける，問題意識の明確化，先行研究の分析，研究の所在の特定が必要である（クレスウェル 2007, pp.84-94，とくに，

pp.89-90)。

2.1 本研究の問題意識と立ち位置

まずは，本研究が持っている研究上の問題意識について説明する。

授業研究，授業分析は，国語や数学といった教科を対象とした教科教育研究において行われる。教科教育研究（池野 2014, 2016）はその特徴として，目標―内容―方法（－評価）の 3(4)者関係で研究し，その対象として授業を位置づける。このように研究構図と対象設定に教科教育研究の独自性がある。

これらの独自性は，学校の教科教育領域だけなのだろうか。そうではなく，類似の，保育，あるいは，社会教育の教育領域にも転用拡張できるのではないか。これが，本研究の問題意識である。

本研究では，保育の領域に教科教育の研究方法を転用し，保育の新しい教育的意義を見い出し，その研究方法論の有効性を明らかにする。

研究方法として授業研究（近年は，レッスン・スタディとも呼ばれている）を用い，研究対象として保育の教育を取り上げ分析する。

保育の研究は主として「子どもの理解」を主眼に置いている（中坪 2012，2017，中坪ほか 2017)。確かに保育では子どもの理解も重要であろうが，保育という教育活動もまた，目的を持って，ある題材（内容）とその方法によって進められる教育活動である。この点では，学校における教科教育と極めて似ている。この点に着目し，教科教育の研究方法の一つ，授業研究を，保育の活動に応用し，その有効性を検討してみようというのが，本研究の目的である。

本研究では，保育を取り上げる。本研究のように，ある研究領域の研究方法論を別の領域の研究に適用するときには，どうしても類似性に着目しがちであるが，違いにも配慮が必要である。違いに着目し，取り上げる 2 つの教育の違いを大胆にまとめると，遊びと勉強，園庭と教室（机と椅子)，活動と学習という対比を作ることができる。

たとえば，教育の場所と形態である。保育所や幼稚園の活動は主に，園庭や保育室である。

保育所の保育室を考えてみよう。保育室にも机や椅子はあるが，学校のように，整然と並んでいるわけではなく，また，子どもたちはその一時間ずっと机を前に椅子に座り，学び続けることはない。あるまとまりの活動が過ぎると，違う活動や異なった場所での活動へと移る。学校では，時に途中で移動することもあるが，大概教室内の活動がその時間，連続して続く。

このような点が，保育所や幼稚園の遊びと，学校の勉強（学習）という表現に現れ，2 つの教育の違いでもある。

保育所や幼稚園の活動にも保育者の意図やねらいはあるが，多くは園児の自主的な活動に委ねられ，強制することは少ない。一方学校では，クラスの活動はジグソー学習のように，分担し個別に，あるいは別々に進めることがあるが，多くはその目的，意図のために，あるところ（多くは，一単位授業時間の終結部）で総合化されまとめられる。

このような違いを踏まえると，さらに，次のような違いを見つけることもできる。保育所，幼稚園は主として環境を通した教育(保育)を，学校は教材を通した教育(教科教育)を進める。

保育所，幼稚園では，すでにある環境，つまり，保育室にあるすべて，園庭にあるものすべてが教材であり，それらは子どもたちの活動，遊びの環境的な材料であり，はじめから保育所や幼稚園では，野草，動物，砂場と特定のものが計画的に決められてはいない。

それに対して，学校ではこの時間は，教師が（子どもたちとともに）自然のうちの植物，あるいは動物，それもアサガオ，あるいは，うさぎに焦点化しそれを題材にし，学びを進める。

このような違いから，保育と学校とは異なった教育領域であり，別々の研究方法で，研究の目指すものも別なものであった。

確かに保育と学校の教育は，成長年齢が違っ

ていても，教育の活動という点では同様なものであり，人の教育活動としては同一のものではないだろうか。そうならば，相互の教育で同じ研究方法を用いて，新たな研究を開始することは両者の教育研究の交流を深め，その効果を両者が理解し合うためにも，有効な成果を上げられるのではないか，と考えられる。

本研究は，このような研究上の立ち位置と見通しをもって，学校教育，特に教科教育研究でよく使用される研究方法の一つ，授業研究を保育の教育活動に持ち込んで，研究の相互交流を意図し，保育の活動をこの授業研究の手法で新たに研究することにしたい。

2.2 保育教育研究のこれまでの研究総括

保育研究の研究レビューは，総括的な保育学研究をレビューした無藤（2003）と，日本保育学会による『わが国における保育の課題』(1997)に限られている。

まず，保育学研究の第一人者である無藤による総括的な研究課題を確認しておこう。

無藤（2003）は保育研究の特質として，実践的，養成的，文脈的，多様性の 4 つを指摘している（pp.103-104)。保育研究は学校と同様，保育者の実践的研究が第一の特徴であり，研究者もまた実践して研究を進めている。保育研究は「実践の学」（p.103）として進んでいる。実践的であることは，研究が保育実践とのつながりを持ち，有用性を求められており，文脈的な研究になりやすい。そのために，いくつかのエピソードが取り上げられ抽象化される。エピソードが取り上げられる保育そのものの特質に依存することになる。

その代表的な保育モデルが，誘導保育（自由保育）と集団保育である（無藤 2003，p.105)。誘導保育は子ども志向であり，子どもの自由な自発性に基づく保育となりがちである。他方の集団保育は子どもの仲間関係を重視したり，地域生活との連続性を強調したりし，仲間づくりにおいて保育者の指導性を重んじ，活動に主題を設け，学びの活動，学校の学習のような，課業としての学習活動を重んずる。

2 つの系統があるとしても，我が国の保育とその実践には無藤（2003）によると，総合性，体系性，組織性，実用性，政策性が欠けている（p.109)。具体的な課題として，次の 7 つを挙げている。①カリキュラムとその開発，②素材・学習材の開発，③育てる力と記録，評価，④内部評価とともに外部評価による保育の改善，⑤ベスト・プラクティスの提示，⑥実践者と研究者との新たな関係による研究・実践の相互の在り方の追求，⑦幼少連携による保育の独自性の明確化（p.109)，である。

無藤による研究概括と課題提示は，日本保育学会の研究動向（『わが国における保育の課題』1997）と関連している。本書『わが国における保育の課題』は保育研究全体を大規模に研究レビューしたものである。本書では，20 世紀末までの研究状況を主に，日本保育学会の研究発表の領域と数にもとづき整理している（森上 1997)。1979－1996 年の日本保育学会の研究発表の整理によると，

第一位　E 保育内容（23.42%）
第二位　L 保育者（11.21%）
第三位　I 保育環境，保育文化（10.84%）
第四位　D 発達（9.74%）
第五位　K 家庭と学校（9.73%）

となっている（森上 1997，p.334)。執筆者の森上は次のようにコメントしている。

・・(前略)・・研究発表の多くが，保育者養成校の教員によって行われていることから，保育者養成のカリキュラムの中で取り上げられている保育内容は，領域に分断されて，教科的に扱われるなど，必ずしも乳幼児の発達の特性に即した追求がなされているとはいいがたい場合が多い。(森上 1997，p.334)

保育内容の研究発表は，養成担当の教員，つまり，保育の実践現場よりも教員養成の現場で，しかも，領域に分け，教科的に扱われていると森上は述べている。

森上自身は研究の担い手，および，教科的な取り扱いに対して，否定的な言葉遣いをしている。保育の研究は教科的な取り扱いよりも，総合的な取り扱いをすべきであるという含意を滲ませている。

しかし，それは保育の教育研究に関する見方の違いに拠っていると理解される。

保育の教育研究について，鳥光（1998, p.208）は次のように述べている。

> ・・（前略）・・「実践事例研究」「実践的研究」，あるいは「観察・記録」のあり方，園内研修のもち方が，反省と実践の循環の形成のための重要な契機として注目される。

保育という保育所，幼稚園の保育者は，実践者でありながら，研究者でもあり，「研究的実践者」という性格をもち，保育研究において科学性をどのように保証するのかが課題となっている（鳥光 1998，pp.205-206）。

観察するだけではなく，本来の保育することも研究に持ち込み，研究と実践が協働することが求められており，客観的な観察と主観的な行為が協働することが必要となっている。先述した無藤も森上もこの点では，保育と保育者，研究者の関係を，客観と主観，あるいは，相互主観の関係として捉え直すことが求められている（鳥光 1998，p.212）と，鳥光と同様な立場であると言えるだろう。このことは，保育学の研究方法論，特に，保育実践と質的研究の関係が問われているといえるだろう（中坪ほか 2017）。

保育の教育研究は，中坪編（2012），西岡（2014）によれば，大きく，次の 5 つに整理される。

① エピソード記述
② 保育マップ型記録
③ エスノグラフィー
④ 映像分析
⑤ ラーニング・ストーリー

エピソード記述と保育マップ型記録は，活動を取り出し，その活動を，エピソードとして記述する，あるいは，マップ型として記録する。ともに，子どもの一人に焦点化し，その活動を記述・記録するものである。一方，エスノグラフィー，映像分析は，観察記述か映像記録かの違いがあるが，特定場面の活動を取り上げる。ラーニング・ストーリーは記述，記録を物語として説明するものである。

これらの 5 つは大きく，主にエピソード記述と保育マップ型記録とが活動の記録の仕方に，エスノグラフィーと映像分析が記録の形態に，ラーニング・ストーリーがその記録の叙述の形に重点化したものである。しかし，これらは，どうしても，子どもの理解に重点化し，活動そのものを取り上げない。とりわけ，その活動の構成と構造を解明しようとすることをしない。保育の活動における構成と構造こそ，本研究によって，保育の教育研究に授業研究を適用し，それによって明らかにしようとすることである。

2.3 保育の先行研究分析

以上のように，保育の教育研究では，一方で保育内容の領域を主にして進められているが，他方で教員養成教育の立場や保育内容の領域的取り扱いに偏していること，また，研究と実践の協働，さらには，保育実践の質的研究の充実が課題として示されている，とまとめられる。

学校教育の教育研究も保育と同様，研究とその方法の見直しが求められている（日本教育方法学会 2014, p.1，日本教科教育学会 2017, p.iii）。大局的に見れば，20 世紀後半に多く使用されてきた研究方法の深化・発展，精緻化が要請されているといえるだろう。

20 世紀後半の授業研究（参照，日本教育方法学会 2009，木下 2016，關 2017），特に教科教

育を対象とした授業研究に関して關（2017）は次の 5 点の特質としてまとめている（p.142）。

1. 授業研究は，研修的・運動的・教科教育的研究があること。
2. 教科教育的研究には，量的・質的研究，授業解明・授業開発研究があること。
3. 授業研究に不可欠なのは，事実の確定（プロトコル）であること。
4. 授業研究には，実証主義的研究とアクション・リサーチの方法論があること。
5. 授業研究には，ステークホルダーとしての地域・学校・教員・子どもなどを念頭に入れて，それぞれの方法論の特性と限界性を常に意識すること。

保育の教育研究領域では，秋田（2004, 2007, 2014）や中坪（2017）は同様な指摘をしている。中坪は次のように述べている。

・・（前略）・・百花繚乱の今だからこそ，保育実践を対象にした質的研究の「質」を問う必要があるのではないだろうか。

それでは一体，保育学において「質」の高い質的研究を行うためには，何が必要なのだろうか。保育実践を対象にした質的研究の「質」をどのように判断し，評価すれば良いのだろうか。保育実践の中で，質的研究の利点が活かされるような，ふさわしい問題設定とはどのようなものだろうか。・・（以下略）。（中坪 2017, p.105）

これらの指摘は質的研究の精緻化とその方法論的担保を要請しているのである。とくに，教育の質的研究では保育や学校教育の教育場面を取り上げ，分析する。その質が問われている。20 世紀末以来，質とその保証が研究で求められるようになった。とくに，GTA（グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach））が広く普及し，教育領域でも用いられるようになり，研究方法論も精緻化されている。GTA はこれまでの解釈学的方法（アプローチ）が持っていた主観性やあいまいさを克服していた。

とくに，GTA は，研究上の特質として公開性，客観性（間主観性），批判可能性の 3 点を持っている。

第一の公開性は，研究で使用される概念や方法を公開し明示することである。第二の客観性（間主観性）は，誰にでもその研究方法や手続きを示し，誰にでも使用可能にすることである。研究の方法や手続きが特定の個人の職人技ではなく，誰にでも開かれ，使用でき，確認できることである。第三の批判可能性は，誰もが批判可能なものである。実践者を含む研究者誰もがそれが許され，実行可能なのである。

GTA は，これまでの授業研究に用いられてきた解釈学的アプローチを超え，その弱点を克服するひとつの研究アプローチなのである。

このような指摘を念頭に置きつつ，本稿では，保育の教育研究の現状を，活動分析を中心に，先行研究に基づき，検討することにしたい。

そこで，検索サイトの CiNii や J-Stage で，保育＋小学校＋活動＋分析＋授業研究の項目で全文検索すると，CiNii で 244 件，J-Stage で 120 件，検索できる[1]。これらの文献を通読し，研究方法としての授業研究を念頭に置いた保育の活動分析を進めている文献，46 編を年代別に整理したものと，各教科の教育研究の整理文献，11 編，併せて，57 編を整理したものが，稿末の付属資料である。

授業研究を保育研究に投入しようとする研究の最初は，小川ほか（1978）であった。意外にも早いものであった。しかし，教育社会学の手法を用いた，コミュニケーション分析であった。質的授業研究を持ち込んだ保育研究はいくつかあり，21 世紀に入って，保育の領域別に見ると，言葉（野口ほか 2007,佐々木ほか 2013，土井 2018），数（東尾 2016，長橋 2016，清水・小幡 2019），環境（土井 2018，田村ほか 2018），

生命（大貫ほか 2017）音楽（今川 2014），図工・美術（辻 2008，丁子 2018，淺野 2019）の内容領域ごとに進められている。その多くが，研究方法論の考察がなされていなかったり，なされていてもあいまいであったりしている。それも領域に依存していることが多い。

保育の研究方法を適用する場合でも，その方法は，エピソード分析（鯨岡 2005，2006，鯨岡・鯨岡 2009，岡花ほか 2008），あるいは，保育マップ型記録（河邉 2010，2013，河邉・赤石 2009）であることが多い。

子どもの活動や行動の記述はあるが，その活動や行動が持っている構成や構造，またその機能は考察されていない。活動や行動を分析し，その構成と構造，また機能を明らかにするために，本研究では授業研究という研究方法論（稲垣・佐藤 1996，吉崎 2019，参照）を導入する（保育研究者も授業研究と言えば，学校の教室に特定化している（秋田 2004，2006a，2007，2013，参照））。

3. 研究方法としての授業研究

授業研究は，教育学，心理学，認知科学など，広くかかわっている。平山編（1997），秋田（2006a）や日本教育方法学会編（2009）はこれまでの授業研究を整理している。

歴史的に見れば，明治時代に始まった授業研究は第二次世界大戦後，改めて見直され，1960年代から活発に進められてきた。学校，行政機関，大学等，民間教育団体・サークルなど，仲間，同僚や共同研究者とともに，教師が授業に関して，すなわち，よりよい授業を作ること，実践すること，新たに見直すことに関して議論し，教師自身が自らの教育力，実践力を向上させることを目指している。

授業研究は，教育が目指す一人ひとりの子どもたちの思考の向上，教師や子どもの行動の分析，会話や談話の分析，一単位授業や単元などの，教科書，教材の学習内容の分析，など多様である。

また方法も，授業前，授業後の授業研究，授業そのものを見る場合，ビデオなどで録画・録音したものを見たり聞いたりする場合，言語記録をもとに話し合いする場合もある。また，参加者も，学校内だけ，他の教師，校内の同僚，他校の教師，教育委員会の指導主事，また，大学などの共同研究者なども参加して行われる。話し合いも，授業そのものについてのみに限られるとき，改善策や改善授業を作り出すときもある。その名も，リフレクション（反省・省察），カンファレンス（診断），ディスカッション（議論）などの形態・名称も使われることもある。

たとえば，佐伯ほか（2018）『ビデオによるリフレクション入門』は，ビデオ録画を用いた授業実践のリフレクションを取り上げている。本書は「実践を分析する（リフレクション）」（p.ii），「実践を振り返る(リフレクション)」（p.iii）ことを提示し，教育実践研究を事例に基づき進め，多様な視点から，多様な解釈を創造する（p.174）。

授業研究は教育実践研究としては，佐伯ほか（2018）のように，教育の目標と方法の関係を問題にする場合と，教科教育の研究（關 2016）のように，さらに内容を問題にする場合とがある。後者の場合が，教科教育研究における授業研究である。

教科教育研究における授業研究，授業分析の特徴は，①授業における内容＝教材に着目し，②その教材の学習を考察し，③学習の構成と構造を解明することにある。

教科の授業研究は，一人ひとりの子どもの理解や思考を取り出して分析する研究もあるが，多くは，プロトコル作成による授業の事実を確定し，授業の構成と構造を解明することを目指している（關 2016，pp.146-147）。

授業研究は，大きくは，事前準備，指導案検討，授業提案・参観，授業批評の 4 段階で進められる。後半，2 つの授業提案・参観，批評では，授業記録として，発言・動作の記録（プロトコル）が作成され，それに基づき，批評され

る。そして，よりよい授業のモデル化を作り出す（木下 2016, pp.110-111，關 2017, pp.146-147)。この手順に基づき，保育の実践を分析することにしたい。

4. 授業分析による保育所の活動分析事例

4.1 研究事例－アローウィン社『保育』シリーズ－

本研究で事例とするものは，各活動を記録した（アローウィン社制作)『保育』シリーズである。このシリーズは次の 4 つの DVD からなっている。

片川智子・河合高鋭・河田聖良監修『保育内容：健康』(2019 年 11 月制作)，アローウィン。
松橋圭子・小林保子・河合高鋭監修『保育内容：環境～子どもの「やりたい」に応える環境～』(2017 年 12 月制作)，アローウィン。
小林保子・河合高鋭監修 (2016)『子どもの社会性を育てる～保育現場に見る「保育・人間関係」～』(2016 年 11 月制作)，アローウィン。
近藤幹生・源証香監修『子どもの「こどば」～保育現場での成長・発達～』(2016 年 3 月制作)，アローウィン。

最新の「保育内容：健康」には次のような解説文が示されている[3)]。

保育所・幼稚園の子どもへの教育（保育）において求められている 5 つの領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）のうち,「健康」について，どう考え，何をどのように教えたら良いのか，実際のこども園で行われている事例をもとに考えます。

文部科学省の幼稚園教育要領では「健康」を教える目的を『健康な心と体を育て，自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。』とされています。

そして「ねらい」としては下記のことが示されています。

(1)明るく伸び伸びと行動し，充実感を味わう。
(2)自分の体を十分動かし，すすんで運動しようとする。
(3)健康，安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。

では，これらを実践するためにはどのような保育をしたらよいのか，子どもの今日的な課題に焦点を当てて，その取り組みの中で考えます。

また,『子どもの社会性を育てる～保育現場に見る「保育・人間関係」～』ついては次のように解説している[4)]。

子どもはどうやって社会性を身につけていくのでしょうか。保育所などの保育現場ではどのようなことが行われ，子どもたちはどう成長していくのでしょうか。「他の人々と親しみ,支え合って生活するために自立心を育て，人かかわる力を育てる」という「保育内容・人間関係」の目的のために保育士は何をしなければならないのでしょうか。DVD では，保育所での子どもたちの日々の生活の中での社会性の獲得についてみていきます。

このように，本シリーズは，幼稚園教育要領が示す 5 つの領域を意識し，その目的とねらいを達成するために，各園，保育者が，また，子どもたちがどのような活動や取り組みをしているのかを子ども園の実践事例に基づき，解説している。授業にあたる部分が，この DVD における子ども園の実践事例である。

本研究は,このDVD保育シリーズを活用し，その活動や取り組みの一部分を紹介しつつ，実際事例の分析を試みようとするものである。

DVD『子どもの社会性を育てる』は次のような構成になっている[5)]。

第 1 部　乳幼児の社会性(9 分)

【信頼性を作る】

【子ども同士の関係をつなぐ】

第 2 部　乳幼児の社会性の発達(18 分)

【人との関わり】新生児模倣・生理的微笑・泣く・後追い・ソーシャルリファレンス/人見知り・共同注意・三項関係・指さし・手渡し・探索行動

【愛着】認められる・自信をつける・嫌な気持ちを知る。

【感情と共感】気持ちを伝える・思いやり・プラスの気持ちとマイナスの気持ち

【自我・自立】自己意識・折り合いをつける・自己主張・依存・他者を意識・優しくする

【道徳性】葛藤・ルール・恥ずかしい・感情のコントロール・自分の役割

第 3 部　遊びに見る社会性(13 分)

【遊びを通しての関わりを考える】

感覚遊び・ひとり遊び・傍観・並行遊び・仲間と遊ぶ・遊びの工夫・いざこざ

相手の気持ちを考える

DVD『子どもの社会性を育てる』は 3 部で構成されている。第 1 部は，乳幼児の社会性は，関係，関わりとして現れており，それを，保育者と子ども，子ども同士の信頼にもとづき発達させるものであることを，第 2 部は，その関わりのいろいろと，そのもとに現れる社会性のいろいろ（愛着，共感，自立，道徳性など）とその発達を，第 3 部では社会性の発達を保育で進められる「遊び」を通して，子どもたちが，ひととの関係の構築をどのように進めているのか，また保育者がそれをどのように支援しているのかを子ども園の実例を通して示している。

4.2 アローウィン社『保育』シリーズ『子どもの社会性を育てる』事例分析

本稿では，試みとして，アローウィン社の保育シリーズの 1 つ『子どもの社会性を育てる』におけるトラブル場面の活動[6)]を取り上げ，授業分析をしたい。

まずは，この活動場面を書き起こし，活動としての事実を確定することにしたい。

(1) 活動場面の書き起こし

場面 1　保育室で子どもたちが遊んでいる。

人	場面・行動・発話
N	4－5 歳児の部屋で，トラブルがあったようです。 ● 18 人程度の子どもたちが座りながら遊んでいる。 ● （後ろに座っていた女の子(G1)と男の子(B1)がケンカする。）女の子(G1)が泣き，保育者（女性）のところに訴えに行く。 ● 女の子(G1)が保育者のところに泣いてやってくる。 ● 保育者は左手で抱いて，(G1 の)背中をなぜなぜしてあげる。
C(G1)	B1 くんがいじわるした！本をね・・・。
N	本の貸し借りをめぐってトラブルがあったようです。
N	● 保育者はこの間，左手で，泣いている女の子を抱擁し，背中を軽く，ポンポンとたたいている。まだ泣いている女の子の発言中も，うん，うん，とうなずきながら聞いている。 泣いている女の子のグループと男の子のグループが本の貸し借りをめぐって衝突しました。 ● この間も，座っている子たちの発言が続くが，聞き取りにくい。
T	おなかすいてたのね。 ● 保育者はずーと，女の子(G1)の背中を撫ぜている。 ● 男の子にフォーカスする。周りには，女の子や男の子がいる。

C(G3)	まだ使いたかったのに，使ってたの。
C(B)	ずーと使いたかったんだよ。
T	そうなんだ。
T	だけどさぁー。お約束を守らなかったからといって，パンチしてよかっ たのかなぁ
N	保育者が間に入って，それぞれに話を聞きながら，みんながトラブルになった原因を話し合っています。
C(G2)	・・・(発言と N がかぶさり，聴きとれない・・）B1 くんだって，楽しそうだから。
C(B1)	G1 ちゃんが悪いんだ。 ● C(G1)がまた泣く。
C(G1)	そんなことない！
C(B)	？？？
T	そんなこといわないで(C(G1)の首に触れる)
N	友だちと意見が合わないとき，どうすればよいのか，保育者がそれぞれ[当事者]に問いかけています。自分で考えたことを伝え合っています。 ● C(G1)はまだ泣いている。

場面 2　保育者が当事者，C(B)くん，C(G1)ちゃん，C(G2)もうひとりの女の子を後ろの現場に連れて行き，再現させる。

人	場面・行動・発話
C(G2)	● C(G2)が説明している。 B1 くんがここで遊んでいたんだよ。 ● 子どもたちは立っているが，保育者は座って，聴いて話をしている。
T	C(G2)さんみたいに，C(B)さんの気持ちをわかってくれる友だちがいるんだから，たたいたりしないで，お口でちゃんと伝えてね。
T	(保育者が C(G1)と対面し，C(G1)に向かって) みんなで，いっぺんに強い口調で言われたらね。
N	男の子が手を上げたのは，女の子のグループに詰め寄られたことが原因でした。
C(G1)	ちゃんと，やさしくなれば，大丈夫。
T	ちょっと，やさしいことばを伝えてね。

場面 3　男の子(C(B))は座っている。女の子(C(G1))は立っている。

人	場面・行動・発話
N	● C(G1)と C(B)が握手する。 ● 左手同士で握手している。 (C(G1)と C(B)の当事者）最後は仲直り。女の子も泣き止みました。

備考：略記号は次の通り。
C=子ども，C(G)=女の子，C(B)=男の子，T=保育者，N=ナレーター。●＝その場面の活動のまとめ

(2) 授業分析

DVD の収録されている活動は，3 つの場面からなっている。

場面 1 はトラブル発生場面であり，保育者によるトラブル制止，考える場面への転換である。保育者は，「お約束を守らなかったからといって，パンチしてよかったのかなぁ。」と問題づくりをしている。ナレーターが述べているように，どうすればよいのかをみんなに考えさせている。

場面 1 は，この問題への回答を出させてはいない。問題場面に個々の子どもたちを立たせ，

問題に直面させ，一人ひとりの子どもたちに答えを出すことを迫っている。しかし，答えを出すことを強いているわけではない。自然とでてくることを保育者は待っている様子である。

場面 2 では，当事者，G1，B1 ともうひとり，G2 の 3 人に対して，どうすればよいのかを現場に連れて行き，再現的に考えさせる。そして，B1 に「お口で伝えてね」と，このときの望ましい行動を指摘し，その理由を「C(G2)さんみたいに，C(B)さんの気持ちをわかってくれる友だちがいるんだから，たたいたりしないで，お口でちゃんと伝えてね。」と説明している。

場面 3 は，仲直りのシーンである。G1 と B1 が握手することで，保育者が G1 と B1 の関係を対立関係から仲間関係に変更させている。

場面１－３を，動作・行動，構成，構造の 3 点から整理すると，次の表 1 のようになる。

表１　トラブル場面の活動分析（筆者作成）

	動作・行動	構成	構造
1	「B1 が G1 をたたいた。」	問題場面発生	考える場面の設定
	「パンチしてよかったのかなぁ。」	問いの提出	
2	問題現場への移動	状況確認	問題とその回答づくり
	場面再現「どうすればよかったか」	問いの確定	
	パンチではなく，お口で伝えることとその理由	適切な行動とその理由説明	
3	B1 と G1 の握手＝仲直り	よりよい関係づくり	関係づくり

場面１～３は，考える場面設定→問題の回答づくり→関係づくりの 3 つからなっている。

(3) 授業考察

表 1 から理解できることは，次の 4 つである。

1. 場面は，考える場面＝シーン，問いの提出と回答の発見，関係づくりの 3 つからなっている。
2. 問題場面から保育者が問いを提出することで，子どもたちが考えている。
3. 保育者は問いへの回答を示している。
4. 子どもたちの中でのトラブル＝問題場面なので，握手によって関係が修復されている。

これらから，領域「人間関係」（社会性）の場面構成としては，保育者が「どうすればよかったか」という問いを中心に構成することで，問いへの答え，問題解決の構造を採っていることが理解される。しかし，この場面では，その問題や問いは保育者が事前に計画したというよりは，偶発性の高い子ども間のトラブルであると考えられる。また，保育者が出した問いに子どもたちが十分な回答を出したとはいえず，保育者が回答案を出して子どもたちの回答を方向づけている。

(4) 検討考察

領域「人間関係」（社会性）の場面は，問いと答えの問題解決的活動で構成されており，小学校の教科の学習と基本構成が同様なものである。

また，当事者間において，問いと答えの学びの活動は成立しているが，クラス全体，あるいは，隣りにいた子どもたちにおける学びはどこまで成立しているかは不明である。

保育者の日常的な計画や意図を除き，DVD の事例のみから判断すると，問いは，発生した子どもたち同士のトラブルによって，自然に見つけられたもので，計画的ではなく，偶発的なものであった。

このような 3 つの点から，この 3 つの場面から成り立っている学び＝学習は，計画的ではなく，活動の中で偶然発生した場面で，保育者の

判断により作り出されたものである。

その場面の活動は，問いへの回答としての問題解決活動として構成され,その回答の深化で,子ども(たち)の思考の深まりとともに，保育者と子ども(たち)の関係の深まりをも作り出している。

以上の保育の活動場面の分析とその結果から,次のような特徴を指摘することができる。

1. 分析方法
   - 授業研究の方法を,目標―方法関連だけではなく,目標―内容―方法関連で,保育に適用できる。保育者は,子ども同士の関係作りを目標に,問いを提出するという方法を用いて,子どものトラブルという内容を扱っていた。
   - 保育の活動は目標―内容―方法関連でもって,分析でき,各場面の構成とその構造で解明できる。
2. 分析結果
   - 学びの活動場面は，保育者の判断により，子どもたちの学びとして作り出される。
   - 活動場面では，保育者が提出する問いによって，子ども(たち)がその問いに答えることで，より深くなされる。
3. 教育的意義
   - 学校教育と同様,保育においても,問いとそれへの答えの問題解決活動によって，学びの活動がある。
   - 保育の活動は，保育者の場面把握によって進められ，子どもの学びは保育者の教育力に左右される。

5. 本稿の総括

本研究は，保育所，幼稚園で進められている幼児教育領域における子どもの発達と学びの豊かさを見つける研究を作り出すことを目的としていた。その中で，本稿は，問題の所在と研究の目的を説明することを主要なねらいとしていた。

そして，本稿で，議論し，また，主張したことは次の 4 点であった。

1. 保育所・幼稚園の教育と小学校の教育とは似ているところと違うところがある。
2. 違いがそれぞれの教育のよさを作り出している。
3. 幼児教育の活動分析と学校の授業分析とを併用することで,指導者と子ども(たち)の活動，その状況を子どもに寄り添った形で評価し，学習対象と学習主体との関係において子どもの成長・発達を説明できるようにする。
4. 本研究は,保育領域における子どもの発達と学びの豊かさを見つける研究を作り出す。

そこで，保育各の領域で進められている活動を取り上げ，学校教育でなされている授業研究を用い，その活動における構成と構造を解明することにした。教科教育研究における授業研究,授業分析の特徴は，①授業における内容＝教材に着目し，②その教材の学習を考察し，③学習の構成と構造を解明することにある。このような特徴をもった授業研究，授業分析を保育の活動分析に適用した。

その事例として，アローウィン社の DVD 保育内容シリーズ（健康，環境，社会性，ことば）の一つである，領域「人間関係」における，社会性に関する一単位の活動を分析した。その結果は，次の通りであった。

1. 場面は,問いと答えの問題解決的活動で構成されている。
2. 当事者間には学びは成立しているが,クラス全体の学びは確認できない。
3. 学びの中心は問いであるが,その問いは偶発的なトラブルにもとづいて保育者がそこで建てたものである。

4. DVD で取り上げた場面は，計画的というより，偶発性の高い学びであった。しかし，保育者の適切な指導により，子どもたちに，その行動への判断と理由付けをさせ，より深い学びを作り出している。

これらの点から，保育の教育領域でも，問いと答えの間を教育する問題解決的活動が行われ，保育における深い学びが成立している。しかし，その活動は，計画的というよりは，偶発性の高い学びであったという点では限られた効果であるといえるだろう。そして，保育の実際場面の活動を授業研究・分析の方法に基づき分析すると，子どもたちの発言や行動の深い学びを見つけることができることを示している。

以上のことが，本稿の研究成果と示すことができた。

これらの研究成果から，保育の教育活動に関して，次のようなことを勧めることができる。

1. 保育もまた，学校教育の活動と似て，問題解決的活動で，構成される。
2. 問題解決的活動では，保育者による保育の問題場面の把握，子どもに考えさせる問い＝問題の提示が重要である。
3. 問題解決活動は，子ども（たち）の学びを作り出すし，また保育者によってそれを深めることも可能である。
4. 保育者は，問題解決活動の場面を把握し，子どもへの問いの提出と子どものその問いへの回答という活動を構成することが必要である。

これらの成果は，保育の他の領域，たとえば，健康，環境においても同様に見られるものかどうか，次稿以降で検討することにしたい。

注

1) 2020 年 2 月 16 日，最終検索閲覧。西岡（2014）では，保育所活動と小学校教育との比較はなされているが，教育研究の交流は残念ながら，なされていない（p.329）。
2) アローウィン(2019)『アローウィン DVD カタログ（映像教材）2020 年版』pp.25-28。
3) アローウィン(2019)『アローウィン DVD カタログ（映像教材）2020 年版』，p.25。
4) アローウィン(2019)『アローウィン DVD カタログ（映像教材）2020 年版』，p.27。
5) アローウィン(2019)『アローウィン DVD カタログ（映像教材）2020 年版』，p.27。
6) 小林保子・河合高鋭監修（2016）『子どもの社会性を育てる～保育現場に見る「保育・人間関係」～』（DVD，アローウィン）の 35：36 から 37：49 までの 2 分あまりの場面を取り上げる。

参考文献

アローウィン（2016）『子どもの社会性を育てる～保育現場に見る「保育・人間関係」～』（DVD）.

アローウィン（2019）『アローウィン DVD カタログ（映像教材）2020 年版』.

秋田喜代美（2004）「教育の場における記録（インスクリプション）への問い」藤田英典ほか編『教育学年報第十巻　教育学の最前線』世識書房，pp.439－455.

秋田喜代美編（2006a）『授業研究と談話分析』放送大学振興会.

秋田喜代美（2006b）「授業研究の展開」秋田喜代美編『授業研究と談話分析』放送大学振興会，pp.22-36.

秋田喜代美（2007）「授業研究の新たな動向：「実践化」の視点から」『日本家庭科教育学会誌』49(4)，pp.249−255.

秋田喜代美（2013）「学び続ける教師をいかに育み支援するか(日本教師教育学会第14回大会（2013年3月9日）講演記録)」日本教師教育学

会編『教師学研究』13，pp.1－12.
淺野卓司（2019）「乳幼児の表現活動と図画工作を繋ぐ粘土活動の系統的な指導についての一考察」『桜花学園大学保育学部研究紀要』19，pp.1－15.
丁子かほる（2018）「造形教育における保幼小中接続へ向けて：発達的視点による表現主題の分析」『和歌山大学教育学部紀要　教育科学』68(2)，pp.43－50.
クレスウェル，J. W.(操華子・森岡訳)（2007）『研究デザイン：質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会.
土井晶子（2018）「保育内容「環境」と小学校教育課程につながる保育者養成授業プログラムの検討（1）～子どもの数量・図形，文字等への関心・感覚～」『共栄大学教育学部研究紀要』(2)，pp.95－108.
東尾晃世（2016）「幼児期の「保育」と小学校「算数教育」の学びの連続性に関する研究(2)：幼児の「数に関する体験」に係る保育者の捉え方の分析を通して」『大阪総合保育大学紀要』11，pp.115-129.
河邉貴子（2010）『遊びを中心とした保育－保育記録から読み解く「援助」と「展開」－（改訂版）』萌木書林.
河邉貴子（2013）『保育記録の機能と役割－保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言－』聖公会出版.
河邉貴子・赤石元子監修・東京学芸大学附属幼稚園編集（2009）『今日から明日へつながる保育－体験の多様性・関連性をめざした保育の実践と理論－』萌木書林．小林保子・河合高鋭監修（2016）『子どもの社会性を育てる～保育現場に見る「保育・人間関係」～』(DVD)，アローウィン.
鯨岡駿（2005）『エピソード記述入門－実践と質的研究のために－』東京大学出版会.
鯨岡駿（2006）『ひとがひとをわかること－間主観性と相互主体性－』ミネルヴァ書房.
鯨岡駿・鯨岡和子（2009）『エピソード記述で保育を描く』ミネルヴァ書房.
池野範男（2009）「３．授業研究による教科指導の改善　第１節　教材開発アプローチ」日本教育方法学会編『日本の授業研究　下巻　授業研究の方法と形態』学文社，pp.33-49.
池野範男（2014）「日本の教科教育研究者とは何をどうする人のことか－教科教育学と教師教育－」日本教科教育学会編『日本教科教育学会誌』36(4)，pp.96-102.
池野範男（2016）「教科教育に関わる学問とはどのようなものか」日本教科教育学会編『今なぜ，教科教育か』文溪堂，pp.99-102.
今川恭子（2014）「幼児と音楽をめぐる質的研究の現在」日本音楽教育学会編『音楽教育学』44(1)，pp.32-39.
稲垣忠彦・佐藤学（1996）『授業研究入門』岩波書店.
木下博義（2016）「教科教育の研究は実践をどのように変えるのか」日本教科教育学会編『今なぜ，教科教育か』文溪堂，pp.107-112.
森上史朗（1997）「保育研究の課題」日本保育学会編『わが国における保育の課題と展望』世界文化社，pp.332-342.
無藤隆（2003）「保育学研究の現状と展望」『教育学研究』70（3），pp.393-400.
長橋秀樹（2016）「美術教育における幼児教育と初等教育の接続に関する課題」『常葉大学教育学部紀要』36，pp.139-156.
中坪史典編著（2012）『子ども理解のメソドロジー—実践者のための「質的実践研究」アイディアブック』ナカニシヤ書房.
中坪史典（2017）「保育実践と質的研究：その「質」を問う」日本保育学会編『保育学研究』55(3)，pp.105-106.
中坪史典・柴山真琴・田中浩司・二宮祐子（2017）「保育フォーラム　保育学の研究方法論を考える(1)」日本保育学会編『保育学研究』55(3)，pp.105-120.
日本教育方法学会編（2009）『日本の授業研究上・下巻』学文社.

日本教育方法学会編（2014）『教育方法学研究ハンドブック』学文社.
日本教科教育学会編（2017）『教科教育研究ハンドブック』教育出版.
日本保育学会編（1997）『わが国における保育の課題と展望』世界文化社.
西岡けい子（2014）「保育実践のなかで子どもをとらえる」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社，pp.326-329.
野口隆子・鈴木正敏・門田理世・芦田宏・秋田喜代美・小田豊（2007）「教師の語りに用いられる語のイメージに関する研究－幼稚園・小学校比較による分析」『教育心理学研究』55(4)，pp.457-468.
小川博久（2014）「幼児理解と教育実践」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社，pp.322-325.
小川博久・山本三重子・間宮由美子・小笠原喜康・見村木綿子・沢田和子・鏑木典子・鈴木由紀子・望月操・福島真由美・池田由紀子・赤石　元子・圓山真理子（1978）「保育行動分析－授業研究の方法論の確立のために」『東京学芸大学紀要第１部門教育科学』29, pp.58-78.
小川博久（2009）「保育という営みの今日的課題－理念と制度の狭間になるもの－」河邉貴子・赤石元子監修・東京学芸大学附属幼稚園編集（2009）『今日から明日へつながる保育－体験の多様性・関連性をめざした保育の実践と理論－』萌木書林，　pp.229-244.
岡花折一郎・杉村伸一郎・財満由美子・松本信吾・林よし恵・上松由美子・落合さゆり・山元隆春（2008）「エピソード記述による保育実践」の省察―保育の質を高めるための実践記録と保育カンファレンスの検討―」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』(37)，pp.229-237.
大貫麻美・八嶋真理子・葛川美希・岡村佳織・高根順（2017）「幼児期から育まれる「生命」に関する見方についての一考察:次期『幼稚園教育要領』『小学校学習指導要領』及び生活科事例分析から」白百合女子大学人間総合学部初等教育学科紀要編集委員会『保育・教育の実践と研究 ： 初等教育学科紀要』(2)，pp.1-8.
大塚忠剛編著（1998）『幼年期教育の理論と実際』北大路書房.
佐伯胖・刑部育子・苅宿俊文（2018）『ビデオによるリフレクション入門』東京大学出版会.
佐々木恵理・服部晃・眞喜志悦子・宮城卓司（2013）「授業での言語活動と行動カテゴリーを用いた評価―（保育・幼・小教育の実践と研究(2)）」日本教育情報学会第 29 回年会『年会論文集』29，pp.254-257.
關浩和（2017）「教科教育の授業研究」日本教科教育学会編『教科教育研究ハンドブック』教育出版，142-147.
清水邦彦・小幡肇（2019）「学生への指導を踏まえ，幼小接続を見据えた小学校「生活」や「算数」に向けた表現の指導法への提言：環境を通して，子どもの表現を多様な表現へと育て，小学校各教科等の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることの解明と方策」文教大学教育学部『教育学部紀要』52(別集)，pp.91-109.
卜部真一郎（2015）「保育方法分析モデルの基礎的考察－活動と関係に着目した保育方法論研究２－」『大阪総合保育大学紀要』9，pp.225-246.
田村美由紀・佐藤純子・矢治夕起（2018）「保育内容（人間関係・環境）と 小学校生活科における幼保小の連携と接続」『淑徳大学短期大学部研究紀要』58，pp.57-67.
鳥光美緒子（1998）「幼児教育の理論と実践」大塚忠剛編著『幼年期教育の理論と実際』北大路書房，pp.205-214.
辻泰秀（2008）「美術教育における実践的研究の展望」『美術教育学：美術科教育学会誌』29，pp.673-685.
吉崎静夫監修・村川雅弘・木原俊行編（2019）

『授業研究のフロンティア』ミネルヴァ書房.
渡邉重義(2007)「理科カリキュラムの連続性に注目した授業実践研究（４）」『日本科学教育学会研究会研究報告』24(2), pp.17-22.

付属資料　活動分析、授業研究に集中した文献（年代順整理）　計　57 編

No.	年	著者	タイトル	所収雑誌	頁
1	1978	小川博久,山本三重子,間宮由美子,小笠原喜康,見村木綿子,沢田和子,鏑木典子,鈴木由紀子,望月操,福島真由美,池田由紀子,赤石元子,圓山真理子	保育行動分析--授業研究の方法論の確立のために	東京学芸大学紀要 第 1 部門 教育科学 (29)	pp58-78
2	1982	水越敏行,梶田叡一	最近の授業改善研究の動向	日本教育工学雑誌 6(3)	pp127-136
3	1990	村川雅弘	新しい授業研究・評価研究の方法を求めて ： 生活科研究の立場から	日本科学教育学会研究会研究報告　1990 年 5 巻 1 号	47-52
4	1993	山口晴久	技術科教育の教育的構造と教育内容	和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』(2)	Pp63-74
5	1997	笹野恵理子・増岡美嘉・籠尾直子	子ども理解から始まる授業の構想と実践	『学校音楽教育研究』1997 年第 1 巻	84-93
6	2000	藤江康彦	一斉授業の話し合い場面における子どもの両義的な発話の機能一小学５年の社会科授業における教室談話の分析-	教育心理学研究, 48	21−31
7	2002	大野木裕明	教授･学習研究の動向(わが国の最近１年間における教育心理学の研究動向と展望)	『教育心理学年報』42	pp98-106
8	2003	無藤隆	保育学研究の現状と展望	教育学研究, 70（3）	393− 400
9		山中文	幼児期の音楽活動における保育者の視点--鼓隊指導の場合	新見公立短期大学紀要 24,	147-154
10	2004	秋田喜代美	授業研究への心理学的アプローチ：　文化的側面に焦点をあてて	心理 学評論, 47 (3), 秋田喜代美(編)2006 授業研究と談話分析　放送大学振興会(14　授業研究と学校文化？)	p, 318−331
11	2005	住田勝	分書き的体験と遊び体験をつなぐもの	『国語科教育』第 57 集	pp11－18
12		竹井史	美術教育研究の深化・発展はいかにして可能になるか	美術教育学：美術科教育学会誌 26	421-433
13	2007	秋田喜代美	授業研究の新たな動向：「実践化」の視点から	日本家庭科教育学会誌 49(4)	pp249−255
14		高橋早苗	反省的実践家としての教育実践記録の意義と活用 一実践記録カンファレンスを通して一	日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』33	pp.49－60
15		野口隆子,鈴木正敏,門田理世,芦田宏,秋田喜代美,小田豊	「教師の語りに用いられる語のイメージに関する研究--幼稚園・小学校比較による分析」	教育心理学研究 55(4)	457-468
		渡邉 重義	理科カリキュラムの連続性に	日本科学教育学会研究	17-22

			注目した授業実践研究　4	会研究報告 2007 年 24(2)	
16	2008	高橋知己,鹿毛雅治,秋田喜代美,浅田匡,藤江康彦,藤澤伸介	授業を意味づける(自主シンポジウム G2)	日本教育心理学会総会発表論文集 2008 年 50	S120-121
16		辻 泰秀	美術教育における実践的研究の展望	美術教育学 : 美術科教育学会誌、29	673-685
18	2009	香曽我部琢	保育者に求められる身体 ： 身体の共振と行為的直観	人体科学 18(1),	43-54
19	2010	齊藤洋子	楽しい園生活を送るための保育の計画と内容、方法、評価についての一考察	高岡法科大学紀要 21	pp45-65
20		丁子かほる	レビュー論文「美術教育における実践知について ： 社会と教育がつながる	『美術教育学』 美術科教育学会誌 31	477-491,
21	2011	新山順子	保育者養成における身体表現授業の学びと保育実践への有用性分析	岡山県立大学保健福祉学部紀要 18,	19-28
22		藤谷智子	幼児期におけるメタ認知の発達と支援	武庫川女子大学紀要. 人文・社会科学編 59	31-42
23		藤森裕治	国語科授業研究における学習者研究の方法論	全国大学国語教育学会発表要旨集 (121)	283-286
24		湯浅恭正,小川英彦,高井和美,吉田茂孝, 新井英靖, 成田孝	特別支援教育の授業づくり ： 教科の学びを問い直す(自主シンポジウム 7,日本特殊教育学会第 48 回大会シンポジウム報告)	特殊教育学研究 48(5),	422-423
25	2012	渡部竜也	「授業研究」からみた社会科研究の方法論と国際化の課題 ： わが国の「規範科学」としての授業研究方法論:6 つの展開	社会科教育論叢 48(0),	47-56
26	2013	秋田喜代美	学び続ける教師をいかに育み支援するか(日本教師学学会第 14 回大会(2013 年 3 月 9 日)講演記録)	教師学研究 13, 1-12	1-12
27		伊深祥子・増茂智子・河村美穂・布施谷節子	日本家庭科教育学会誌における授業研究の動向:2000 年から 2009 年	日本家庭科教育学会誌 56(2), 69-77	69－77
28		佐々木恵理, 服部晃, 眞喜志悦子,宮城卓司	授業での言語活動と行動カテゴリーを用いた評価 (日本教育情報学会第 29 回年会) -- (保育・幼・小教育の実践と研究(2))	授業での言語活動と行動カテゴリーを用いた評価(日本教育情報学会第 29 回年会) -- (保育・幼・小教育の実践と研究(2))	254-257
29		島田佳枝	協働としての学び合いを支える<共感的なかかわり>についての一考察 ： 幼児との造形的な遊び場づくりに取り組む親たちの関係性の変容に着目して	美術教育学 : 美術科教育学会 34	pp.243-259
30	2014	今川恭子	幼児と音楽をめぐる質的研究の現在	日本音楽教育学会編『音楽教育学』44(1)	32-39
31		佐島群巳	臨床としての「授業」	星槎大学共生科学会『共生科学』5 (5)	75-87
32		山田修平	幼児期の科学実験遊び:幼児と保護者に向けた科学実験の在り方	『淑徳短期大学研究紀要』53	pp.113-126
33	2015	卜部(しもべ)真一郎	保育方法分析モデルの基礎的	『大阪総合保育大学紀	225－246

			考察―活動と関係に着目した保育方法論研究２―	要』9	
34		瀧川光治	子どもの気づきを広げ、深めるための保育方法	大阪教育大学『Educare』(35)	19-33
35	2016	長橋秀樹	美術教育における幼児教育と初等教育の接続に関する課題	常葉大学教育学部紀要第 36 号	Pp139－156
36		東尾晃世	幼児期の「保育」と小学校「算数教育」の学びの連続性に関する研究(2) 幼児の「数に関する体験」に係る保育者の捉え方の分析を通して	大阪総合保育大学紀要(11)	115-129
37	2017	大貫麻美，八嶋真理子，葛川美希，岡村佳織，高根順	幼児期から育まれる「生命」に関する見方についての一考察：次期『幼稚園教育要領』『小学校学習指導要領』及び生活科事例分析から	白百合女子大学人間総合学部初等教育学科紀要編集委員会『保育・教育の実践と研究 ： 初等教育学科紀要』(2),	Pp. 1－8
38		加納誠司	幼小の連携・接続における生活科の果たす役割と可能性	愛知教育大学教職キャリアセンター紀要、第 2 号	pp9－16
39	2018	太田友子	幼児期における「振り返り」活動 ―幼小接続期におけるメタ認知に関する一考察―	『大阪総合保育大学紀要』12 号	pp179 – 196
40		田村美由紀・佐藤純子・矢治夕起	保育内容（人間関係・環境）と小学校生活科における幼保小の連携と接続	『淑徳大学短期大学部研究紀要』第 58 号	pp57－67
41		丁子かほる	造形教育における保幼小中接続へ向けて：発達的視点による表現主題の分析	和歌山大学教育学部紀要 第68集 第２巻 教育科学	43－50
42		土井晶子	保育内容「環境」と小学校教育課程につながる 保育者養成授業プログラムの検討（1） ～子どもの数量・図形、文字等への関心・感覚～	『共栄大学教育学部研究紀要』(2)	95－108
43		藤井佑介	授業省察における教師の自己内対話	日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』 43	25-36
44	2019	淺野卓司	乳幼児の表現活動と図画工作を繋ぐ粘土活動の系統的な指導についての一考察	『桜花学園大学保育学部研究紀要』(19)	pp1－15
45		清水邦彦・小幡肇	学生への指導を踏まえ，幼小接続を見据えた小学校「生活」や「算数」に向けた表現の指導法への提言：環境を通して，子どもの表現を多様な表現へと育て，小学校各教科等の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることの解明と方策	文教大学教育学部『教育学部紀要』第 52 集別集	pp91－109
46		山崎晃・松井剛太・濱田祥子	幼小接続に係る小学校の実態に関する研究の展望と学習状況-NISE データベースの分析をとおして(1)	広島文化学園大学大学院教育学研究科『子ども学論集』(5)	pp15－28

教科教育の研究動向（11 編）**日本教科教育学会誌**

①山元隆春(2003)
「国語教育学の研究動向と展望 ： 全国大学国語教育学会『国語科教育』掲載論文を中心に(教科教育学の展望・評論(第 3 回))」
日本教科教育学会誌　2003 年 25 巻 4 号 79-88
②吉田裕久(2005)
「国語教育学研究の動向と展望(研究動向と展望)」
日本教科教育学会誌　2005 年 28 巻 2 号 91-100
③片上宗二,角田将士,久保啓太郎(2003)
「教科教育学研究の動向と展望:方法論的視点からの社会認識教育学研究の動向(研究動向と展望)」
日本教科教育学会誌　2003 年 26 巻 2 号 69-78
④小山正孝(2005)
「教科教育学の研究動向と展望:日本の数学教育学における近年の研究動向と展望」
『日本教科教育学会誌』2005 年　27 巻 4 号 91-100
⑤松浦拓也・角屋重樹(2004)
「教科教育学研究の研究動向と展望:教科教育学的視点からの理科教育学研究の動向」
日本教科教育学会誌 26(4), 69-76,2004
⑥吉富功修(2002)
「教科教育学研究の動向と展望:音楽科教育学の研究内容と研究方法を視点として」
日本教科教育学会誌　2002 年 24 巻 4 号 41-50
⑦松岡重信,松尾千秋,菅尾尚代,岩田昌太郎,郭万里,王水泉(2006)
「皮肉を込めて「研究」を語れば……： 体育科の授業評価研究の動向と展望(研究動向と展望)」
日本教科教育学会誌 28(4), 71-79, 2006
⑧福田公子・林未和子（2004）
「教科教育学研究の動向と展望 ： 家庭科教育に関する学会誌掲載論文を中心に」
日本教科教育学会誌 27(1),pp73-84, 2004
⑨三根和浪,宮本恭二郎,橋本泰幸(2006)
「学会誌に見る美術教育学研究の動向と課題(研究動向と展望)」
日本教科教育学会誌　2006 年 29 巻 3 号 87-96
⑩寺尾慎一(2008)
「生活科教育を巡る研究動向と展望(研究動向と展望)」
日本教科教育学会誌　2008 年 30 巻 4 号 109-118
⑪三浦省五,猫田英伸(2008)
「「英語教育」の研究と動向 ：ARELE の研究の変遷と展望(研究動向と展望)」
日本教科教育学会誌　2008 年 31 巻 2 号 75-84